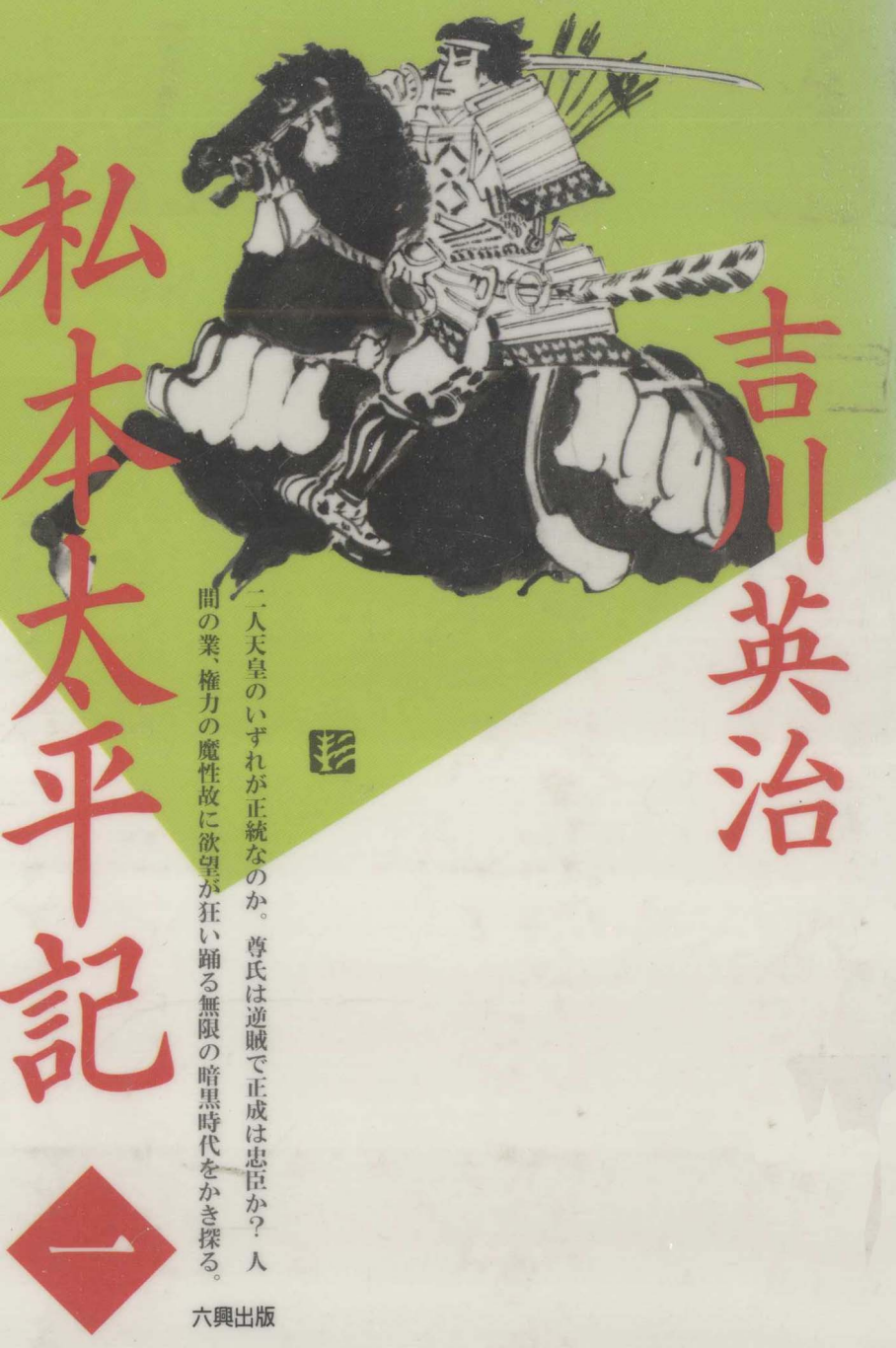
吉川英治
私本太平記
一
二人天皇のいずれが正統なのか。尊氏は逆賊で正成は忠臣か？人間の業、権力の魔性故に欲望が狂い踊る無限の暗黒時代をかき探る。
六興出版

吉川弘文館

# 私本太平記

第一巻　あしかが帖　婆娑羅帖

江苏工业学院图书馆
藏书章

**私本太平記　第1巻（全8巻）**

平成2年6月25日　初版発行
平成2年11月10日　2刷発行

著　者　吉川英治
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社六興出版
〒112 東京都文京区水道2－9－2
電話　03（943）3431（代表）
振替　東京1-92448

印刷・製本　中央精版印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。
ISBN 4-8453-0407-4 C0093

# 「私本太平記」を読む前に

この作品は、吉川英治の最後の大作である。週刊朝日に七年半にわたって「新・平家物語」を執筆したあと、引続いて毎日新聞に昭和三十三年一月十八日から同三十六年十月十三日まで三年九ヵ月、一三二五回にわたって連載したものである。その連載の最中、昭和三十五年秋には、多年、国民文学に寄与したという理由で「文化勲章」を受賞、さらにこの「私本太平記」の完結に対しては三十七年正月に「毎日芸術大賞」を贈られている。これによって一大国民文学の金字塔が樹立されたという事由であった。

ところで吉川英治は、この作品の完結間近い三十六年夏ごろから健康がすぐれず、秋口には歩行すら困難な状態となった。そして血痰を吐きつつ、ただ強烈な精神力だけで執筆が続けられた。病因は肺ガンであった。完結を待ちかねたように慶応病院へ入院、大手術を受けた結果、ともかく危機を脱して退院。暫く小康状態が続いたが突然、夏に再発、遂に三十七年九月七日に永眠されたのである。七十歳であった。この作品はこうして吉川英治の七十年の生涯の最後を飾った大作となったのである。

さて、この作品は南北朝時代を舞台に後醍醐天皇、足利尊氏、楠木正成などの繰りひろげる歴史絵巻を描いたものだが、執筆の苦労は並大抵ではなかった。第一にこの時代は、皇統の機微にふれるため学者たちにタブーとされていたことである。そのため研究が甚だ遅れており、いわば日本史上の空白時代といってよい時代であった。第二には、戦前の教育では足利尊氏は逆賊、楠木正成は忠臣とされ、それが敗戦によってこうした価値観が一転、従って歴史的人物への読者のイメージが混乱していたことである。にも拘らず、吉川英治は敢えてこの荒野へと駒を進めて行った。

それではまず吉川英治は、この難テーマをどう描こうとしたのか。三十六年元旦の毎日新聞に発表した「新春太平綺語」の中で、自らこう語っている。

「逆賊尊氏も、忠臣楠公も、私には、えこもひいきも全くない。その時代の下に生きた一個の家庭の父、一個の人間、社会人として、どう描きうるかがまずさしあたっての苦吟である。人間尊氏を私はやはり人間的な気の弱さや人のよさを多分にもった人だったと思っている。正成にしても、そうである。みんな社会、みんな周囲が、彼をしてやむなくさせなければ、河内の一田舎武人として、よい妻やよい子にかこまれ、垣の梅花を楽しんだり、老後は菊の花でも作って、しごく平和に、また平和に天寿を全うしたろうにと思われる。その点、かの日柳燕石が、楠公の詩に『過マッテ武人ニ生レ』と歌っているのは、偶像楠



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

公にいささか人間の待遇を以て涙しているもので、今の私たちに共鳴される」

つまり、まず一切の既成の価値観（史観）にとらわれずに、人間として後醍醐天皇を、足利尊氏を、楠木正成を見直そうというのである。これは執筆の姿勢として最高のものといってよい。

次に吉川英治は、この作品の中で作家として何を描こうとしたか。

「建武年間、正平以後にかけてまで、半世紀の血みどろを地上に現じ出してしまったのは、いったい誰れの所業か、何の作用か、私は人間同士の住むこの世には、何か〝誰れ〟と指摘できない摩訶不思議な素因がどこか跳梁している気がしてならない。小説の中では、そんなものを、つきとめてみたい意欲がするのである。――南北朝の世をかりて、ひとつその、この世の影なき魔ものの正体を、読者とともに、考えてみようというのが私の意図でもある」

吉川英治は、文学者として南北朝を舞台に、人間の闘争・戦争の正体と対決しようとしたのだ。まことに南北朝興亡史は、そのテーマには格好な、血泥な絵巻でもあった。

かくてその血泥な人間の葛藤を描き尽した吉川英治は、最後に、「その正体は一言にしていえば権力のもつ魔力である。権力欲とは何なのか。摩訶不思議な魅力をもって人間共を操り世を動かす恐ろしいものだ」（黒白問答）というのである。考えてみれば確かに南

北朝史とは、天皇という絶対権力をめぐって人々が演じた修羅絵巻といってよい。いやさらに日本史の流れをみても、いかに天皇という絶対権力をめぐる修羅が多かったことか、天皇とは何か、改めて日本史の中に問い直す必要があるだろう。

ところでこの作品の中で吉川英治は、「権力の魔力に憑かれた人間がひきおこした戦乱」を、単に「人間愚」といったきめつけ方はしない。もっと深く人間を見つめて、そこに一つの諦観を示しているのである。つまり、権力をめぐる人間の争いは「人間の宿業」であり、ある意味では「人間が悪時代をこえ、前進するための不幸な手段であった」（黒白問答）といい、さらに楠木正成の最期を例にひいて、こういう。

「ただその不幸を誰よりもよく知って、人間の叡智をもてと、あえてすべてを祈りへ捧げて壮烈な自滅をとった人もいる――楠木正成がそれだ」（黒白問答）

まことに「祈り」こそ、人間のささやかな叡智をこえたものであり、文豪吉川英治の七十年の最後の言葉であったといってもよいだろう。

松本　昭

# 目

# 次

あしかが帖
下天地蔵……11
大きな御手……25
時の若鷹……39
ばさら大名……53
藤夜叉……68
あばれ川……88
新田桜……103
置文……113
なべとかま……129

裁許橋……140
うつつなき人……153
登子……163
波まぎれ……178
不知哉丸……189

## 婆娑羅帖

乱鳥図……207
正中ノ変……223
楠木たずね……234

悲歌……247
ぶらり駒……262
繚乱七種……276
妖霊星……295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# あしかが帖（じょう）

# 下天地蔵

まだ除夜の鐘には、すこし間がある。

とまれ、ことしも大晦日まで無事に暮れた。だが、あしたからの来る年は。

洛中の耳も、大極殿のたたずまいも、やがての鐘を、偉大な予言者の声にでも触れるように、霜白々と、待ち冴えている。

洛内四十八ヵ所の篝屋の火も、つねより明々と辻を照らし、淡い夜靄をこめた巽の空には、羅生門の甍が、夢のように浮いて見えた。そこの楼上などには、いつも絶えない浮浪者の群れが、あすの元日を待つでもなく、飢えおののいていたかもしれないが、しかし、とにかく泰平の恩沢ともいえる事には、そこらの篝番の小屋にも、町なかの灯にも、総じて、酒の香がただよっていた。都の夜靄は酒の匂いがするといってもいいほど、まずは穏やかな年越しだった。

「さ、戻りましょうず。……若殿、又太郎さま。……はて、これは困った。いつのまにやら、邪気も無う、ようお寝みだわ」

一色右馬介は苦笑した。ゆり起しても、若い主人の寝顔は、居酒屋の床几に倚った儘、後ろの荒壁を背に、ぶらぶら動くだけなのである。

「これはちと、参らせすぎたな。やはりお年はお年」

右馬介は侍者として、急に自分の酔をさました。ここは錦小路の、俗に〝請酒屋〟とも〝小酒屋〟ともよぶ腰かけ店だ。こんな所へ、御案内したと知れただけでも、あとで上杉殿からどんなお叱りを受けるかと。

かつて、自分は六波羅の大番役も勤め、都は何度も見ていたが、又太郎ぎみには、初めての御見物だ。すべてが、もの珍らしくてならないらしい。

所で、こんどの上洛では、彼も驚目したことだが、なんと都には、酒屋が殖えたものだろう。――という感を、ここの亭主にただしてみたら、十年前には醸造元の〝本酒屋〟も百軒とは無かったものが、当今では洛中だけでも二百四、五十軒をこえ、その上、近江の百済寺で造るのや、大和菩提寺の奈良酒だの、天野山金剛寺の名酒だの、遠くは、博多の練緯酒までが輸入されてくる有様なので、請売の小酒屋も、かくは軒を競っておりますので、と言うことだった。

なるほど、これは自分たちの国元、関東などでは見られない。

だが、この凄まじい酒屋繁昌は、人心の何を語っているものか。ただ単に、これも泰平の余沢といえる現象なのか。

主従しての、そんな話から浮いて、つい、

「何も土産ぞ。奈良酒とやら百済酒とやら、ひとつ、飲みくらべてみようではないか」

と、なったものだ。

これは、又太郎から、言い出した事としても、こんなに迄飲ませてしまったのは、重々自分も悪かった、と思うしかない。

「若殿、若殿。もはや相客とて、たれ一人おりませぬ。さ、立ちましょう。除夜の鐘もそろそろ鳴る頃……」

又太郎は、やっと眼をさました。醒めた顔は、いとどあどけないほど若々しくて、唯まぶしげにニヤと笑う。そして、直垂の袖ぐちで、顎のよだれを横にこすった。

「ああ、よいここちだった。右馬介、よほど長く眠ったのか、わしは」

又太郎は伸びをした。その手が、ついでに、曲がっていた烏帽子を直した。やっと現に返った眼でもある。

その眼元には、人をひき込まずにいない何かがあった。魔魅の眸にもみえるし、慈悲心の深い人ならではの物にもみえる。どっちとも、ふと判別のつき

かねる理由は、ほかの部分の、いかつい容貌のせいかもしれない。

骨太なわりには、痩肉の方である。顎のつよい線や、長すぎるほど長い眉毛だの、大きな鼻梁が、どこか暢びり間のびしている所など、これは西の顔でもなし、京顔でもない。坂東者に多い特有な骨柄なのだ。それに、幼いときの疱瘡のあとが、浅黒い地肌に妙な白ッぽさを沈めており、これも女子には好かれそうもない損の一つになっている。

けれど今、従者の一色右馬介にゆり起されて、無言でニッと見せた羞恥み笑いや、大どかな風貌の魅力さといったらない。きっとこの郎党は、この若いおあるじの為には、どんな献身も誓っているのではないかと思われる。

とにかく、醜男の方ではあるが由緒ある家の子息ではあろう。佩いている太刀なども、こんな小酒屋の客には見ぬ見事な物と、亭主もさっきから、眼をみはっていた様子だった。

「されば、お眠りはつかのまでしたが、昼、六波羅を出たばかり。さだめし、上杉殿のお内でも、この深夜まで、どこを何して歩いてぞと、お案じのことに相違ございませぬで」

右馬介の分別顔を、一方は屈託もなく笑い消した。

「ばかな、そんな心配をだれがするものかよ。こたびの上京こそは、せっかく、よい見学として、諸所、くまなく見て帰れとは、国元の父上のみならず、六波羅の伯父上も、くどいほど申された事だ。まして、右馬介も付いておる事と」

「その儀は、とく心得ておりまするが、程なく元旦にもなりますことゆえ」

「そうだ、除夜だなあ。ことしの除夜の鐘を、都で聞こうとは思わなんだぞ。明くれば、又太郎も十八歳。右馬介、おまえとは幾つちがいだっけな」

「ちょうど、十歳上に相成ります」

「十の違いか。わしがその年になるまでには、きっともう一度、都へ上る日があろうぞ。鎌倉のありか

たと言い、眼に見た都のさまと言い、これがこのままの世でいるわけはない。おやじ、もう一壷、酒を持ってまいれ」

「や。そのように、お過ごしなされては」

「なぜか今夜は、腸がわしへ歌うのだ。飲むべき夜なれと、腸が申す。まあ、そう言うなよ右馬介」

分別は、こちら以上にあるお人である。きかない御気性である点も、日頃の練武修学、すべてにおいてなのだから、かくなってはお守役の右馬介も、黙って控えてしまうしかない。

と、そのとき、まるで木枯しでも吹きこんで来たように、この小酒屋の軒ばから、

「オオ。ここはまだ開いていたぞ。酒だ、酒だ。おやじ、それに何ぞ温い物でもないか」

と、凄まじい人々の吐く白い息が、どやどやと、土間いっぱいに込み入って来た。

たちどころに、土間は小酒屋らしい混雑と雑言で、埋まった。

十数名の武者は、みな小具足の旅姿だった。といってもあらましは、足軽程度の人態にすぎない。争いあって、一碗ずつの酒を持ち、干魚か何かを取ってはムシャムシャ食う。そしてやや腹の虫がおさまり出すと、こんどは野卑な戯れ口で果てしもない。

彼らには、片隅の先客など、眼の外だった。又太郎の方でも、思わぬ光景を肴として、声も低めに、ひそと、ただ杯を守っていた。

「右馬介。……どうやら鎌倉者らしいな」

「左様で。話ぶりでは、鎌倉から紀州熊野へ、何かの御用で行った帰路の者かと察しられますが」

「む。うなずかれる事がある。先ごろ、熊野新宮へ御寄進の大釜一口に、大檀那鎌倉ノ執権北条高時と、御銘を鋳らせたものを運ばせたとか伺っていた。それの帰りの一と組だろう、この輩も」

「さてこそです。どうも最前から、犬を連れているのは妙だなと、見ておりましたが」

「なに犬を。どこに」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.